

態十二令月

花鏡泉

青空文庫

いちぐわつ
一月

さんれい ゆき ふか
山嶺の雪なほ深けれども、其の白妙に紅の日や、美しきか
たま はる しょうらい ととき なみ ぎん
な玉の春。松 籟時として波に吟ずるのみ、撞いて驚かす鐘も
なし。まんざい つゞ 鳴る まりうた ちか うめ か あひき
萬歳の鼓遙かに、鞀唄は近く梅ヶ香と相聞こえ、突羽
ばねたもとまつ いうぜん ひるがへ
根の袂は松に友染を飜す。をかし、此のあたりに住ふなる橙の
ちやうじや きちれい こんぶ かりぎぬ ことのぼら たち はきそ
長者、吉例よろ昆布の狩衣に、小殿原の太刀を佩反ら
し、なゝくさ さと わかなつ ゆづりは の
七草の里に若菜摘むとて、讓葉に乗つたるが、郎等勝
ちぐり よ いは
栗を呼んで曰く、あれに袖形の浦の渚に、紫の女性性は誰
そ。…… しゞみぜん さふらふ
蜺御前にて候。

にぐわつ
二月

にしび かわ 西日に乾く井戸端の目筈に、めざる 残シの寒さよ。かね 鐘いまだ氷る夜の、
きた 北の辻の鍋焼餛飩、かすかいけ 幽に池の石に響きて、みなみえだ 南の枝に月凄し。ひと 一
ばん つ半鉦の遠あかり、それ 其も夢に消えて、あかつきしも 暁の霜に置きかさぬる灰
ろくも 色の雲、あたらし 新しき障子あつ を壓す。ひとり南天の實に色鳥の音
づれ 信を、まどは 窓晴るゝよ、と見れば、み ちらくくと薄雪、うすゆき 淡雪。降
つも るも積るも風情かな、みかいこう 未開紅の梅の姿。そ 其の苔の雪を拂はむと、
おきこたつ 置炬燵より素足にして、けはひ 化粧たる柴垣に、にはげた 庭下駄の棲を捌く。

さんぐわつ
三月

いたいけなる幼^{をさなご}兒に、優^{やさ}しき姉^{あね}の言^いひけるは、緋^ひの氎^{せん}の奥^{おく}深^{ふか}
く、雪^{ほんぼり}洞^{かぶすか}の影^{ひな}幽^{また}なれば、雛^{たま}の瞬^{たま}き給^{たま}ふとよ。いかで^み見^みむとて寢^ね
もやらず、美^{うつく}しき懷^{ふところ}より、かしくも密^そと見^み参^{まゐ}らすれば、其^その上^{うへ}
に尚^なほ女^め夫^{をと}雛^{ひな}の微^ほ笑^{ゝゑ}み給^{たま}へる。それ^{ゆめ}も夢^{ゆめ}か、胡^こ蝶^{てふ}の翼^{つばさ}を^{かい}權^かにして、
桃^もと花^は菜^なの乗^{のり}合^あ船^{あひぶね}。うつゝに漕^こげば、うつゝに聞^きこえて、柳^{やなぎ}の
土^ど手に、とんと當^{あた}るや鼓^{つづみ}の調^{しらべ}、鼓^{たんぼ}草^ぼの、鼓^{つづみ}の調^{しらべ}。

しぐわつ
四月

春の粧の濃き淡き、朝夕の霞の色は、消ゆるにあらず、晴るゝ
 にあらず、桃の露、花の香に、且つ解け且つ結びて、水にも地に
 も靡くにこそ、或は海棠の雨となり、或は松の朧となる。山
 吹の背戸、柳の軒、白鵝遊び、鸚鵡唄ふや、瀬を行く筏は燕の
 如く、燕は筏にも似たるかな。銀鞍の少年、玉駕の佳姫、
 ともに恍惚として陽の闌なる時、陽炎の帳靜なる裡に、木
 蓮の花一つ一つ皆乳房の如き戀を含む。

五月

藤の花の紫は、眞晝の色香朧にして、白日、夢に見ゆる麗

人の面影あり。憧憬れつゝも仰ぐものに、其の君の通ふらむ、
 高樓を渡す廻廊は、燃立つ躑躅の空に架りて、宛然虹の
 醉へるが如し。海も緑の酒なるかな。且つ見る後苑の牡丹花、
 赫耀として然も靜なるに、唯一つ繞り飛ぶ蜂の羽音よ、一杵
 二杵ブンくと、小さき黄金の鐘が鳴る。疑ふらくは、これ、龍
 宮の正に午の時か。

ろくぐわつ
六月

照り曇り雨もものかは。辻々の祭の太鼓、わつしよいくの
 諸勢、山車は宛然藥玉の纏を振る。棧敷の欄干連るや、

咲掛る^{さか}凌霄^{のうぜん}の紅^{くれなゐ}は、瀧夜叉姫^{たきやしやひめ}の襦袢^{じゆばん}を欺^{あざむ}き、紫陽花^{あぢさゐ}の淺葱^{あさぎ}は光圀^{みつくに}の襟^{えり}に擬^{まが}ふ。人^{ひと}の往來^{ゆきき}も躍^{をど}るが如^{ごと}し。酒^{さけ}はさざんざ松^{まつ}のかぜみどり風^{かぜ}。緑^{こまや}いよく濃^なかにして、夏木立^{なつこだち}深き處^{ふかところ}、山幽^{やまう}に里靜^{さとじづか}に、然^{しか}も今^{いま}を盛^{さか}の女^{をんな}、白百合^{しらゆり}の花^{はな}、其^その膚^{はだ}の蜜^{みつ}を洗^{あら}へば、清水^{しみづ}に髮^{かみ}の丈^{たけ}なが長^{なが}く、眞珠^{しんじゆ}の流雫^{ながれく}して、小鮎^{こあゆ}の簪^{かんざし}、宵月^{よひづき}の影^{かげ}を走^{はし}る。

七月^{しちぐわつ}

灼^{しやく}熱^{ねつ}の天^{てん}、塵紅^{ちりめか}し、巷^{ちまた}に印度更紗^{インドサラサ}の影^{かげ}を敷^しく。赫耀^{かくえう}たる草^{くさ}や木^きや、孔雀^{くじやく}の尾^をを宇宙^{うちう}に翳^{かぎ}し、羅^{うすもの}に尚^なほ玉蟲^{たまむし}の光^{ひかり}を鏤^{ちりば}むれば、松葉牡丹^{まつばぼたん}に青蜥蜴^{あをとかげ}の潛^{ひそ}むも、刺繡^{ぬひとり}の帶^{おび}にして、驕^{おご}れる

貴女きぢよの装よそほを見るみ。盛さかんなる哉かな、炎暑えんしよの色いろ。蜘蛛くもの圍ゐの幻まぼろしは、却かへつ
 鄙ひなさ下がる蚊帳かやを凌しのぎ、青簾あをすだれの裡なかなる黒猫くろねこも、兒女じぢよが掌しやうち
 中うのものならず、髯ひげに蚊柱かばしらを號令がうれいして、夕立ゆふだちの雲くもを呼よば
 むとす。さもあらばあれ、夕顔ゆふがほの薄化粧うすげしやう、笕かけの水みづに玉たまを含ふく
 で、露臺ろだいの星ほしに、雪ゆきの面おもてを映うつす、姿すがたまた爰こゝにあり、姿すがたまた爰こゝにあ
 り。

はちぐわつ
八月

向日葵ひまはり、向日葵ひまはり、百日紅ひやくじつこうの昨日きのふも今日けふも、暑あつさは蟻ありの數かずを
 算かぞへて、麻野あさの、萱原かやはら、青薄あをすゝき、刈萱かるかやの芽めに秋あきの近ちかきにも、

草くさいなきくもれな尚くもほな曇くもるなまで、立たち蔽おほふ 旱ひでりぐもおそろ 雲い恐ちりづかしく、一いち里りづか塚かにおに鬼おには
 あはらなずなや、並なみ木きのをがさ小い笠か如い何かならいむ。否いな、炎えん天てん、情なさけあり。常とこ夏なつ、
 花はな咲なけり。優やさしきさよ、松まつ蔭かげのしみづ清や水なぎ、柳みのおとしづく井こゑ、音おとにしづく雫こゑにこゑ聲こゑありて、
 旅たび人ひとにつゆ露わかをほそ分だきてとこば、細こ瀧たきのところ心てん 太たち、忽すちう酢うにう浮うかれて、鰐う
 鮑どん、蒟こん蒻にやをあ嘲あけるとき時ひ、冷ひ奴や豆やつ腐このた蓼たはすじめてす涼すしく、爪つま
 紅ななるかに蟹むれのす群み、納す涼みのみづ水うをう打うつてい出いづ。やがてさらくとわた渡わたる
 山やま風かぜや、月つきのかげ影うりにをど瓜をどがをど踊をどる。踊な子にはな何な々くぞ。南たう瓜なす、冬とう
 瓜あん、青あを瓢ふく、白しろ瓜うり、淺あさ瓜うり、眞ま桑くは瓜うり。

くぐわつ
九月

のこんあつ 残の暑さ 幾日ぞ、又幾日ぞ。然も刈萱の蓑いつしかに露
 しげ 繁く、芭蕉に灌ぐ夜半の雨、やがて晴れて雲白く、芙蓉に晝の蜚
 なとき 鳴く時、散るとしもあらず柳の葉、斜に簾を驚かせば、夏瘦せに
 なうつく 尚ほ美しきが、轉寢の夢より覺めて、裳を曳く濡縁に、瑠璃
 そら 空か、二三輪、朝顔の小さく淡く、其の色白き人の脇明を覗
 おび きて、帯に新涼の藍を描く。ゆるき扱帯も身に入むや、遠き
 やま 山、近き水。待人來れ、初雁の渡るなり。
 ちか みづ まちびときた はつかり わた

じふぐわつ
十月

くもゆ 雲往き雲來り、やがて水の如く晴れぬ。白雲の行衛に紛ふ、
 くもきた みづ ごと は しらくも ゆくへ まが

蘆間あしまに船ふねあり。粟あは、蕎麥そばの色紙しきしば畠たけ、小田をだ、棚田たなだ、案山子かゝしも遠とほく
 夕越ゆふこえて、宵暗よひぐらきに舷白ふなばしろし。白銀しろがねの柄えもて汲くめりてふ、月の光つきひかり
 を湛たふるかと見みれば、冷き露つめたつゆの流ながるゝ也なり。凝こつては薄うすき霜しもとなら
 む。見みよ、朝風あさなぎの浦うらの渚なぎさい、潔さぎよき素絹そけんを敷しきて、山姫やまひめの來きたり描ゑが
 くを待まちつ處ところ——枝えだすきたる柳やなぎの中なかより、松まつの蔦つたの梢こずゑより、染そめ出いだ
 す秀嶽しうがくの第一だいいつぽう峯ほう。其その山風やまおろし里さとに來きたれば、色鳥いろどり群むれて瀧たき
 を渡わたる。うつくしきかな、羽は、翼つばさ、霧きりを拂はらつて錦葉もみぢに似にたり。

十一月

青碧せいへき澄ちやうめい明てんの天てん、雲端うんたんに古城こじやうあり、天守てんしゆ聳そばだ
 立たてり。

濠の水、菱黒く、石垣に蔦、紅を流す。木の葉落ち落ちて森寂
 に、風留むで肅殺の氣の充つる處、枝は朱槍を横へ、薄は
 白劍を伏せ、徑は漆弓を潛め、霜は鏃を研ぐ。峻峰皆將
 軍、磊嚴盡く貔貅たり。然りとは雖も、雁金の可懷
 を射ず、牡鹿の可哀を刺さず。兜は愛憐を籠め、鎧は情
 懷を抱く。明星と、太白星と、すなはち其の意氣を照らす
 とき、何事ぞ、徒に銃聲あり。拙き哉、驕奢の獵、一鳥高
 く逸して、猒笑ふこと三度。

じふにぐわつ
 十一月

大根だいこんの時雨しぐれ、干菜ほしなの風かぜ、鳶とびも鳥からすも忙せはしき空そらを、行く雲くものまゝ
 に見みつゝ行ゆけば、霜林さうりん一寺いちじを抱いだきて峯靜みねづかに立たてるあり。鐘かねあれ
 ども撞つかず、經きやうあれども僧そうなく、柴しばあれども人ひとを見みず、師走しはすの市まち
 へ走はしりけむ。聲こゑあるはひとり筧かけひにして、巖いはを刻きざみ、石いしを削けづりて、
 冷つめき枝えだの影かげに光ひかる。誰たがための白しろき珊瑚さんごぞ。あの山越やまこえて、谷越たにこ
 えて、春はるの來きたる階きざしなるべし。されば水筋みづすぢの緩ゆるむあたり、水仙すゐせん
 の葉寒はさむく、花暖はなだに薰かかりしか。刈かりあとの栗あはばたけ畑やまどりに山鳥すがたの姿あら
 はに、引棄ひきすてし豆まめの殻からさらくくと鳴なるを見みれば、一抹いちまつの紅塵こうぢん、
 手鞠てまりに似にて、輕かろく巷ちまたの上うへに飛とべり。

大正九年一月—十二月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年4月24日作成

2003年5月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

態十二令月

花鏡泉

2020年 7月13日 初版

付 奥

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>